

各関係機関団体の長
各病害虫防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病害虫防除所長

平成18年度病害虫発生予報第5号について

このことについて、病害虫発生予報第5号を発表したので送付します。

トビイロウンカの発生に注意！！

今年はトビイロウンカの飛来が例年より早く、飛来量も多くなっています。地域により飛来状況に差があり、トビイロウンカのは場内での発生状況、生育ステージにはバラツキが見られるので、必ず各自では場の見回りをを行い、適期防除に努めて下さい。

ほ場毎に発生状況を確認し、防除を徹底しましょう。

ほ場内での発生の分布は偏りが大きいいため、確認は広範囲を丁寧に行ってください。



トビイロウンカ成虫



昨年の坪枯れ発生状況

株元に薬剤が届く様に散布しましょう。

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。にわか雨や雷雨の日もあるでしょう。

気温は平年並か高いでしょう。降水量は平年並でしょう。日照時間は平年並か多いでしょう。

週別の気温は、1週目、2週目、3～4週目いずれも平年並か高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	40	40
降水量	30	40	30
日照時間	20	40	40

(福岡管区気象台 18年7月28日発表抜粋)

予報第5号

向こう1ヵ月間の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	発生現況	発生予報	
		(平年比)	(平年比)	(前年比)
普通期水稻	いもち病 (葉いもち・穂いもち)	少	少	並
	紋枯病	並	並	やや少
	セジロウンカ	やや多	多	並
	トビイロウンカ	やや多	やや多	やや多
	コブノメイガ	並	並	並
	斑点米カメムシ類	並	やや多	やや多
大豆	ハスモンヨトウ	並	並	並
カンキツ	黒点病	やや多	やや多	多
	ミカンハダニ	並	並	並
ナシ	ナシヒメシンクイ	やや多	やや多	やや多
カキ	炭疽病	やや少	やや少	やや多
	フジコナカイガラムシ	並	並	少
	ハマキムシ類	やや多	やや多	やや多
果樹共通	カメムシ類	やや多	やや多	多
茶	炭疽病	少	並	並
	輪斑病	少	並	少
	カンザワハダニ	少	並	並
	チャノホソガ	少	少	少
	チャノコカクモンハマキ	並	並	少
	チャノミドリヒメヨコバイ	少	やや少	並
	チャノキイロアザミウマ	やや多	やや多	並
イチゴ (育苗期)	ハダニ類	やや多	やや多	やや多
	炭疽病	並	並	並
ネギ	シロイチモジヨトウ	やや多	やや多	やや多
アスパラガス	アザミウマ類	やや多	やや多	やや多

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 普通期水稻】

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年より少なく、前年並

（2）予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果（±）

発病株率 0.3%（平年 7.7%、前年 0.1%）

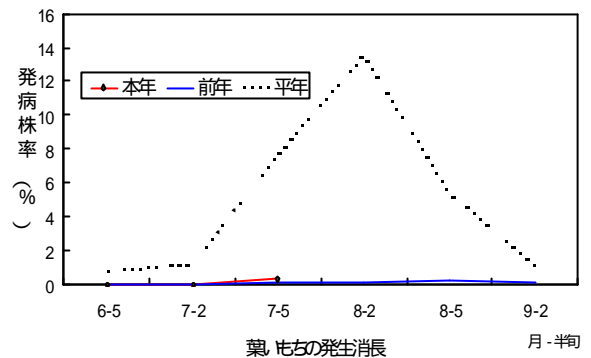
イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。（-）

（3）防除上の注意

ア 葉いもちの進行型病斑が多く見られるほ場では、早急に防除を行う。

イ 穂いもちの薬剤防除を行う場合の防除適期は、粉剤は出穂期前後、粒剤は出穂前処理と、剤型で使用時期が異なるので注意する。

ウ 防除薬剤は「平成18年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する（以下の病害虫についても同様）。



2 紋枯病

（1）予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少ない

（2）予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果（±）

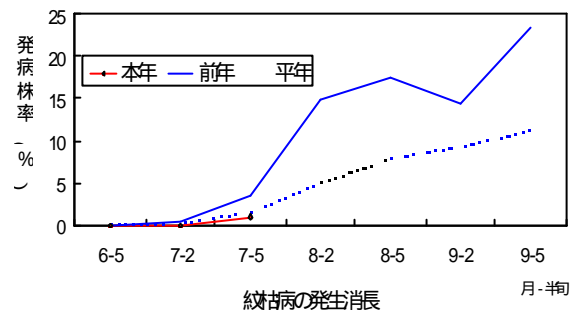
発病株率 1.0%（平年 1.5%、前年 3.5%）

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。（+）

（3）防除上の注意

出穂以降は病斑が上位葉へと進展するため、

発生ほ場では防除を行う。粉剤による薬剤防除を行う場合、最も効果が高いのは出穂期10～14日前である。粒剤の場合は、薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので各々の使用基準を確認する。



3 セジロウンカ

（1）予報の内容

発生量：平年より多く、前年並

（2）予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果（+）

10株当たり払い落とし成幼虫数 54.7頭（平年 23.4頭、前年 78.4頭）

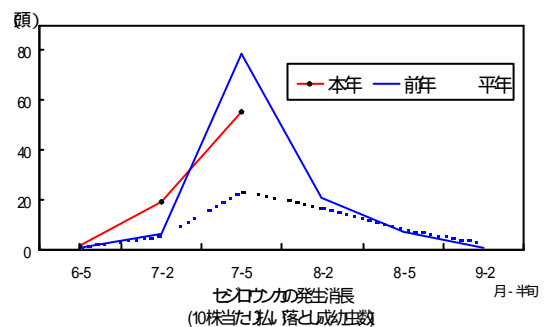
イ 6月6半旬～7月5半旬までの予察灯（5地点）での誘殺虫数は1,341頭（平年877.6頭、前年741頭）であり、飛来量は平年より多い（+）。

ウ 6月5半旬頃から断続的な飛来が続き、特に7月2半旬、7月4半旬の誘殺虫数が多かった。主要飛来は7月5～7日と考えられる。（+）

エ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高いと予想される。（+）

（3）防除上の注意

地域により飛来成虫の誘殺状況に差が見られるため、各々のほ場を見回りウンカ類の発生状



況、生育ステージをよく確認し、発生パターン図（別紙1）を参考に最適防除時期を決める。

4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果（+）

10株当たり払い落とし成幼虫数 1.2頭（平年0.2頭、前年0.5頭）、発生ほ場率 46.4%（平年12.5%、前年21.7%）

イ 6月6半旬～7月5半旬までの予察灯（5地点）での誘殺虫数は35頭（平年32.6頭、前年27頭）であった。（+）

ウ 向こう1か月間の気温は平年並か高いと予想される。（+）

(3) 防除上の注意

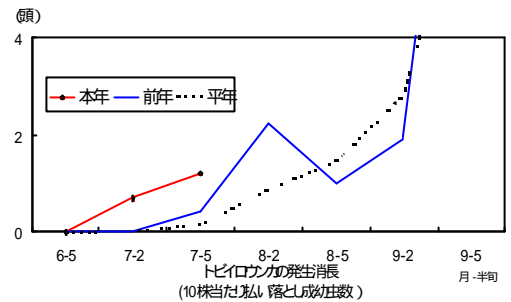
ア 今年はセジロウンカ、トビイロウンカが早い時期から多飛来してきているため、ほ場での発生状況を必ず確認する。

イ 移植時に箱施薬剤を施用したほ場においても、若齢幼虫～短翅型雌成虫までの全生育ステージを確認したため、今後の発生状況に注意する。

ウ 主要飛来波と考えられる7月6日の飛来成虫（飛来波）の薬剤防除効果が高い第2世代の幼虫期は、8月6日頃からである（別紙1）。地域により飛来成虫の誘殺状況に差があるため、各々のほ場を見回り発生状況、生育ステージをよく確認し、発生パターン図（別紙1）を参考に、最適防除時期を決める。

エ 要防除水準（ほ場における中老齢幼虫の発生量が、8月上旬は100株当たり20頭、8月下旬は100株当たり100頭）を越える場合は、早急に防除を行う。

オ 防除薬剤が、トビイロウンカの生息域である株元に十分かかるよう散布する。



5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

7月5半旬の調査結果（±）

食害株率 5.0%（平年5.3%、前年4.5%）

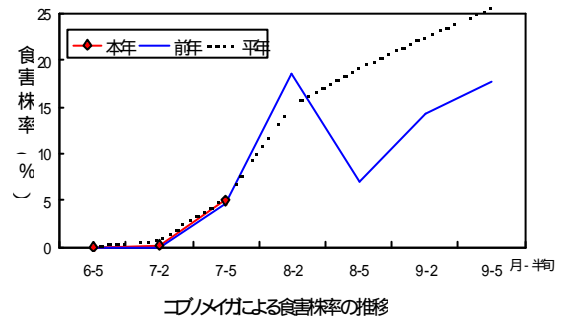
30㎡当たり払い出し成虫数 0.5頭（平年0.7頭、前年0.5頭）

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は発蛾最盛期の1週間後である。捲葉が目立つようになると、幼虫の齢期が進み防除効果が発揮できない。

イ 防除時期は、発生予想パターン図（別紙1）を参考にするが、地域により発生状況に差があるため、各々のほ場内での発生状況を把握して、最適防除時期を決める。

ウ 収量、品質への影響が大きい止葉を含む上位3葉への食害の恐れが見込まれる場合は、防除を行う。



海外飛来性害虫の防除の考え方

今年は、ウンカ類の飛来期間が長く、飛来量も多く、これからのほ場での発生には十分な注意が必要である。また、コブノメイガの発生状況は、地域によりやや多いほ場がみられる。

同時防除を考える場合は、各々のほ場での発生状況を確認の上、箱施薬剤の有無、薬剤の種類を考慮し、発生予想パターン図（別紙1）を参考に最適な防除時期と薬剤を決める。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(±)

片振り20回すくい取り成幼虫数

クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類

畦畔 0.6頭(平年1.1頭、前年2.1頭)

雑草地 5.5頭(平年5.5頭、前年3.6頭)

カスミカメムシ類

畦畔 10.7頭(平年9.8頭、前年11.5頭)

雑草地 45.7頭(平年22.5頭、前年17.3頭)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高いと予想される。(+)

(3) 防除上の注意

ア 畦畔や休耕田の雑草は、カメムシ類の発生源となるので、出穂前に早めに除草を行う。

イ 防除適期は、穂揃期及びその7～10日後である。

ウ 防除は、水田周辺の畦畔など、カメムシの発生源も含めて行うと効果が高い。

【普通作物 - 大豆】

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月1半旬～5半旬の筑紫野市フェロモントラップによる誘殺虫数は213頭(平年329.8頭、前年525頭)であり、平年より少なく推移した。(-)

イ 向こう1ヶ月の気象予報は、平年並か高く、降水量は平年並と予想される。(+)

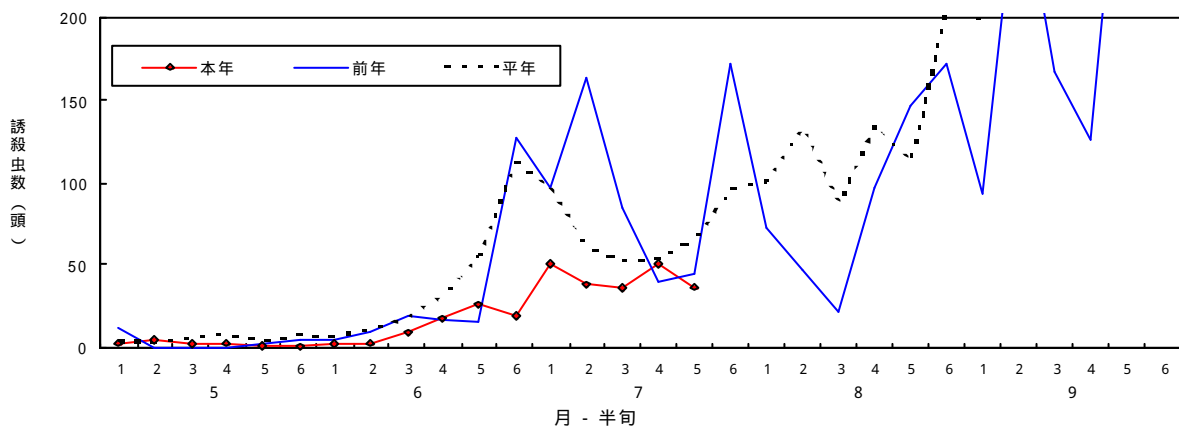
(3) 防除上の注意

ア 分散前の若齢幼虫が群棲している大豆の白変葉は直ちに除去する。

イ 防除は、効果が高い若齢幼虫期に実施する。

ウ 防除適期はフェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃となるが、前後する場合がありますため、大豆の白変葉が発生し始めたら出来るだけ早く防除を行う。

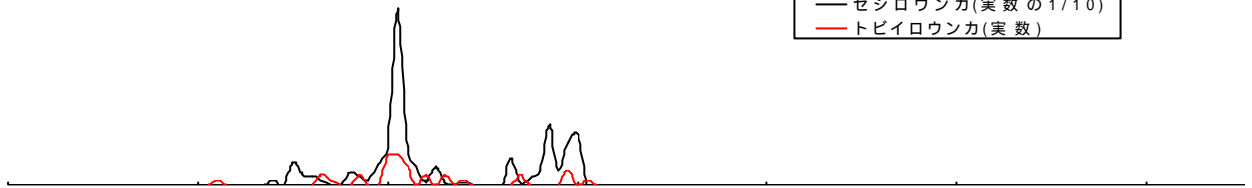
エ 近隣にフェロモントラップを設置されていない場合は、病害虫防除所のホームページにフェロモントラップの誘殺状況(筑紫野市、筑後市、行橋市)を掲載するので、参考にして防除時期を決める。



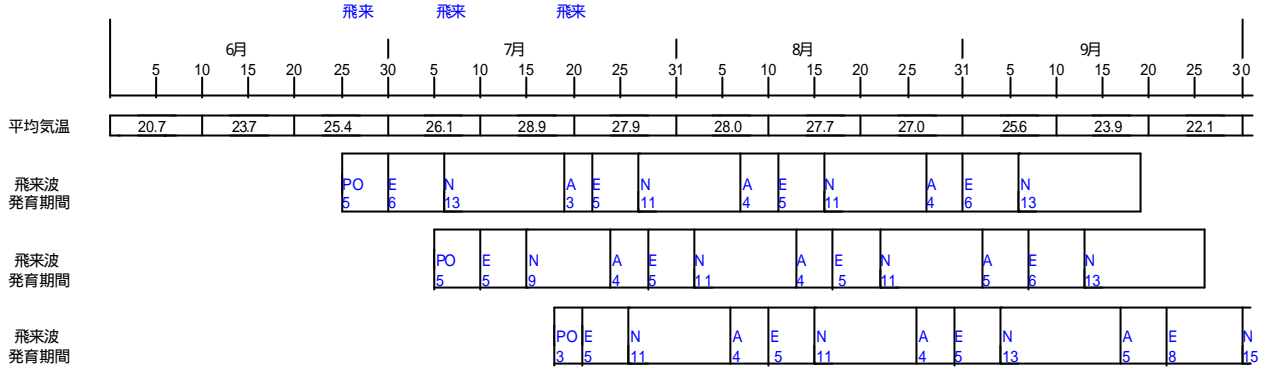
ハスモンヨトウのフェロモントラップによる誘殺虫数の推移(筑紫野市)
1:武田式乾式トラップ 2:7月1-3日、9月5,6日は欠測

別紙1) 海外飛来性害虫の誘殺状況に基づく発生予想パターン図

予察灯での誘殺状況

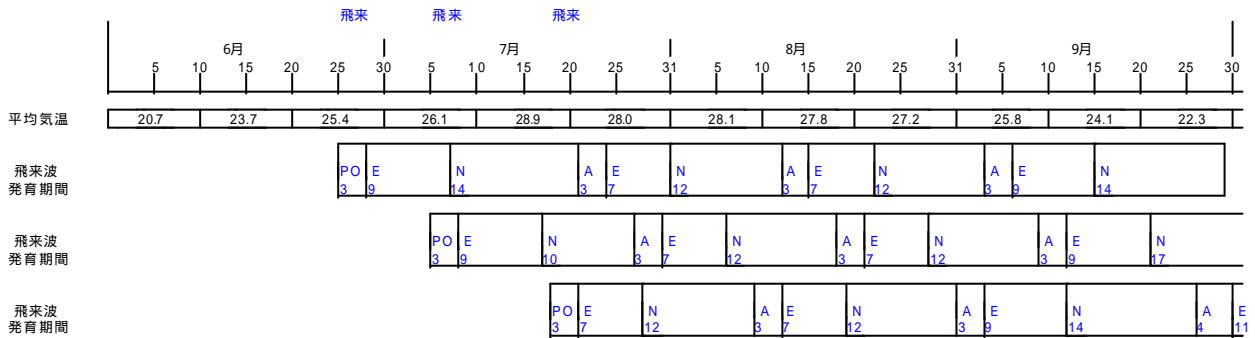


セジロウンカ



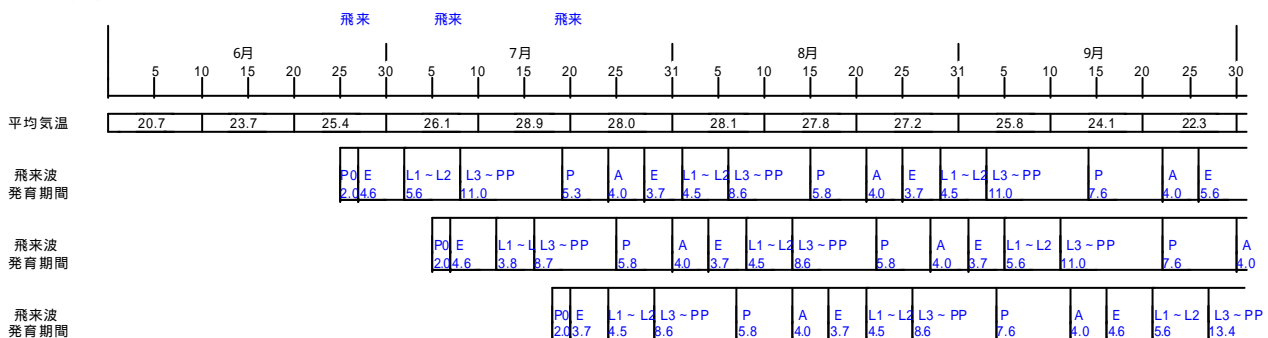
PO：産卵前期間 E：卵 N：幼虫（不完全変態） A：成虫

トビロウンカ



PO：産卵前期間 E：卵 N：幼虫（不完全変態） A：成虫

コブノメイガ



PO：産卵前期間 E：卵 L：幼虫(不完全変態) PP：前蛹 P：蛹 A：成虫

- 1：発生パターン図は、主要飛来時期を起点にして、半月毎の平均気温を基に温度別の発育期間を積算して作成したものであるため、各々のほ場での発生状況を確認の上、必要に応じて補正を加えて利用する。
- 2：飛来波はウンカ類（セジロウンカ、トビロウンカ）の誘殺状況を基に設定し、コブノメイガはウンカ類と同時飛来と推定
- 3：平均気温は、福岡管区気象台福岡観測所の数値（7月中旬までは本年の数値、7月下旬以降は平年値）

【普通作：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況	発生予報		防除上注意すべき事項等
	(平年比)	(平年比)	(前年比)	
早期水稲 トビイロウンカ	やや多	やや多	-	<p>【予報の根拠】 飛来量は平年より多かった。7月5半旬調査結果、10株当たり払い落とし成幼虫数は0.75頭（平年 0.34頭）、発生ほ場率は50.0%（平年15.9%）であった。</p> <p>【防除上の注意】 発生の増加が見られるほ場では早急に防除を行う。薬剤の選定に当たっては、収穫前日数などの農薬使用基準を確認する。</p> <p style="text-align: center;">早期水稲におけるトビイロウンカの発消長 (10株当たり払い落とし虫数)</p>

【果樹】

1 カンキツ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(+)

発病果率 4.5% (平年 1.7%、前年 0.4%)

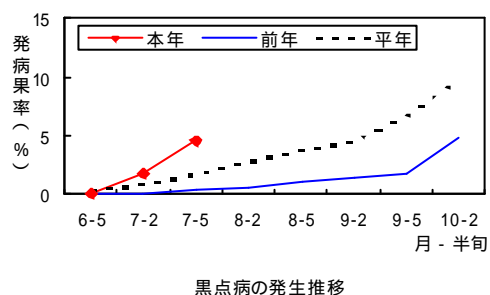
発生ほ場率 47.1% (平年 30.6%、前年17.6%)

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

ア 枯れ枝は感染源となるので、発生が多い園では枯れ枝を除去する。

イ 降雨が続くと多発するので、積算降水量250mmを目安に降雨の合間をぬって防除を行う。



2 カンキツのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(±)

寄生葉率 14.9%(平年 11.6%、前年 11.5%)

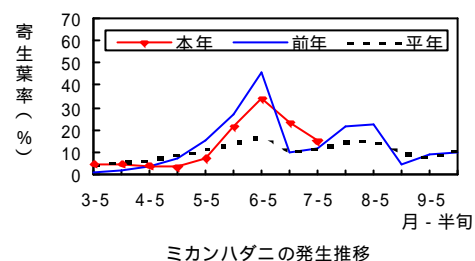
発生ほ場率 76.5%(平年 53.1%、前年 62.5%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

ア 薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 同一系統薬剤の連用は、薬剤感受性の低下を来す可能性があるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



ミカンハダニの発生推移

3 ナシのナシヒメシクイ

(1) 予報の内容

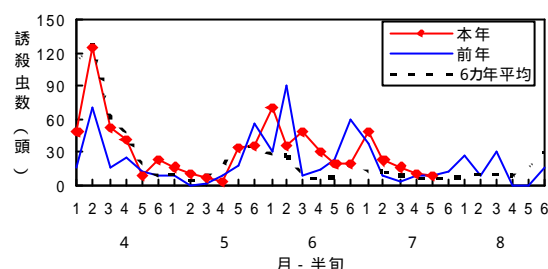
発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

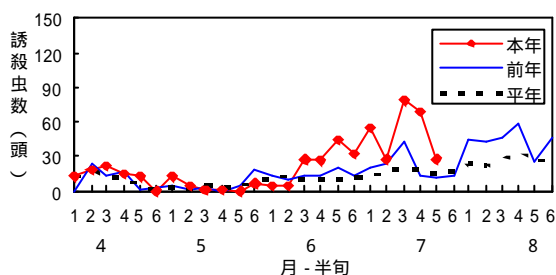
ア 7月1半旬～5半旬までのフェロモントラップの誘殺数(+)

(県内3カ所の平均)

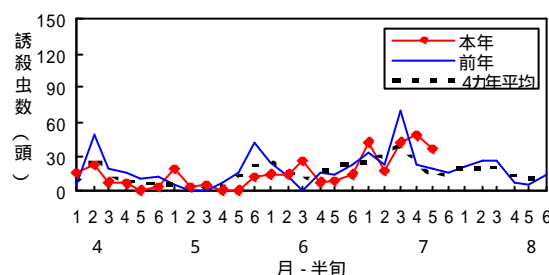
184頭(平年 88頭、前年 116頭)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(朝倉市杷木)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(黒木町)



フェロモントラップによる誘殺虫数の推移(筑後市和泉)

イ 7月5半旬調査結果(±)

被害果率 0.2%(平年 0.4%、前年 0.6%)

発生ほ場率 21.4%(平年 16.1%、前年 14.3%)

ウ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

ア 第3世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で8月上旬～中旬、山間地域で8月中旬～下旬頃と予想される。

イ 発蛾最盛期直後を目安に防除を行う。なお、発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、更に7～10日後に追加防除を行う。

ウ 幼虫は主に果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては、果実に薬液が十分かかるように散布する。

エ 収穫期に入る品種もあるので、防除に当たっては、農薬使用基準を確認し、薬剤の選定に注意する。

4 カキ炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果（-）

発病枝率 0.3%（平年 2.0%、前年 0.1%）

発生ほ場率23.5%（平年 33.5%、前年12.5%）

発病果率 0.3%（平年 1.0%、前年 0.3%）

発生ほ場率17.6%（平年 34.1%、前年 6.3%）

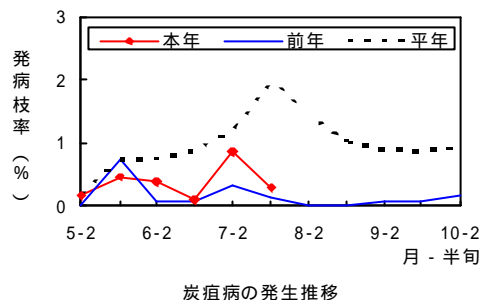
イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並が高く、降水量は平年並である。（±）

(3) 防除上の注意

ア 罹病枝及び罹病果は、感染源になるので除去する。

イ 降雨により感染が拡大するので、発病枝の多い園では防除を徹底する。また、発病枝の少ない園でも台風等の強風雨が予想される場合は、必ず防除を行う。

ウ 樹冠内部の徒長枝に発病しやすいので、樹冠内部にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。



5 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果（±）

寄生果率 7.7%（平年 7.8%、前年14.9%）

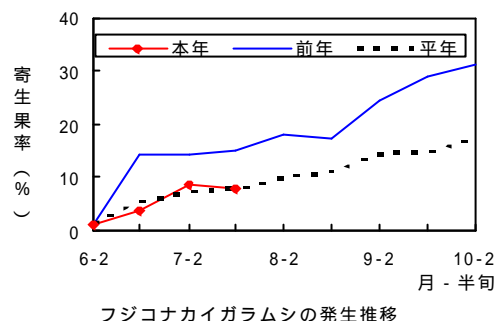
発生ほ場率76.5%（平年63.2%、前年94.1%）

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並が高く、降水量は平年並である。（±）

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は、薬剤感受性が最も高い若齢幼虫期であり、第2世代幼虫出現期が8月10日前後と予想されるため、若齢幼虫期を見極め防除する。

イ 防除は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などに薬液がかかるよう丁寧に散布する。



6 カキのハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果（+）

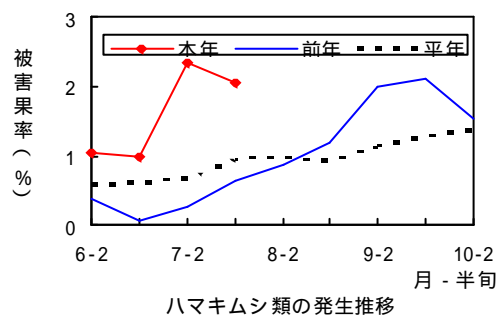
被害果率 2.1%（平年 0.9%、前年 0.6%）

発生ほ場率76.5%（平年46.1%、前年29.4%）

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並が高く、降水量は平年並である。（±）

(3) 防除上注意すべき事項

本虫は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面等に多く寄生しているため、十分な薬量を使って散布むらのないように防除する。



7 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年より多い

(2) 予報の根拠

県下6か所の予察灯の平均誘殺数は、平年よりやや多く、県下各地のカキ、ナシ等の果樹園で主として越冬世代による加害が見られ始めているところもある。県南地域（筑後農林管内）の予察灯では、梅雨明け後に急増しており、今後、果樹園への飛来が多くなることが予想され

る。

ヒノキのピーティング調査でも、寄生虫数は平年より多く、新成虫のヒノキからの離脱時期は、県下32か所の平均口針鞘数によると9月1日頃と予想されるが、県南地域はヒノキでの寄生虫数及び口針鞘数が多いことから8月20日頃と予想される。

8月1日速報第3号参照

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況 (平年比)	発生予報		防除上注意すべき事項等
		(平年比)	(前年比)	
カンキツ かいよう病	やや多	やや多	並	比較的罹病性が低い温州に発生が多いめ、中晩柑類は特に注意する。台風等の強風雨が予想される場合は、できるだけ事前に防除を行う。
ナシ ハダニ類	並	並	やや多	多発すると防除が困難になるので初期防除を徹底する。
ブドウ べと病	やや多	やや多	少	夏期高温時にも展葉中の若い葉があれば感染発病する。
カキ うどんこ病	少	少	並	葉裏に十分かかるよう防除する。
柿 ハダニガ	並	並	並	フェロモントラップ調査では、防除適期は8月上旬頃と予想される。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果 (-)

発病葉数 0.3葉(平年 3.8葉、前年 1.4葉)

発生ほ場率 12%(前年 16%)

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並か高

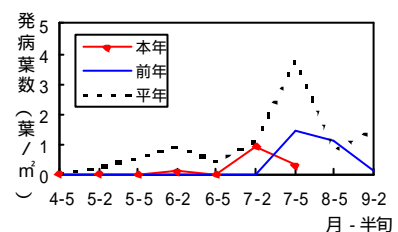
く、降水量は平年並である。(+)

(3) 防除上の注意

ア 整枝後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに薬剤防除を行う。特に最終摘採後の新芽の防除は、翌年の一番茶の品質・収量に大きく影響するため、防除を徹底する。

イ 雨滴により孢子が飛散するので、防除は降雨前が効果が高い。

ウ 同一系統薬剤の連用は、薬剤感受性の低下を来す可能性があるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



炭疽病の発生推移

2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(-)

発病葉数 0.08葉(平年 0.31葉、前年 0.20葉)

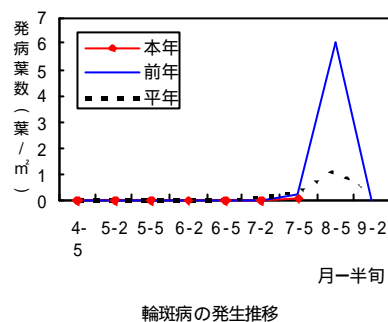
発生ほ場率 4%(前年 8%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。(+)

(3) 防除上の注意

ア 葉や茎の傷口から病原菌が侵入感染するため、薬剤防除は三番茶摘採又は刈落とし当日か翌日に行う。

イ 本病の発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(-)

寄生葉率 0.4%(平年 0.8%、前年 0%)

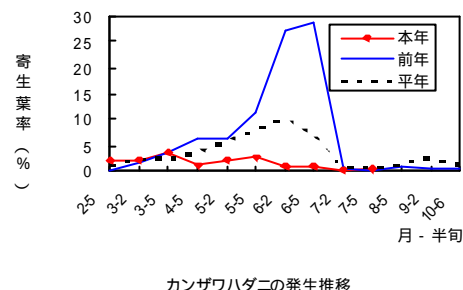
50葉当たり虫数0.3頭(平年 1.5頭、前年 0頭)

発生ほ場率 12%(前年 0%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。



4 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(-)

被害葉数 0.6葉(平年 2.0葉、前年 1.2葉)

発生ほ場率 28%(前年 40%)

イ 7月1半旬から7月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数(-)

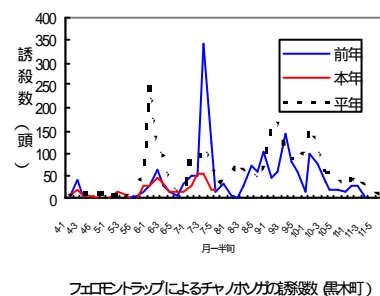
調査地点：黒木町 174頭(平年 398頭、前年 579頭)

ウ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

ア 第4世代成虫の発蛾最盛期は、8月下旬から9月上旬と予想されるので、成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後を目安に防除を行う。

イ 捲葉後は防除効果が劣るため、捲葉が散見されたら直ちに防除を行う。



5 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(±)

被害葉数 0.7葉(平年 0.3葉、前年 1.5葉)

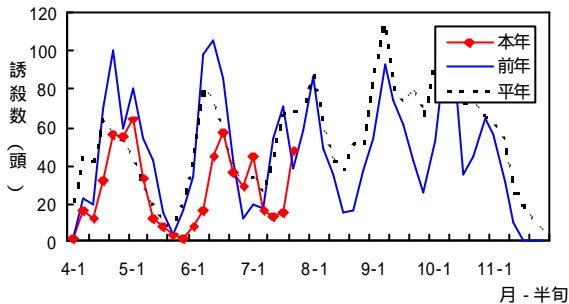
発生ほ場率 24%(前年 56%)

イ 7月1半旬から7月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数(±)

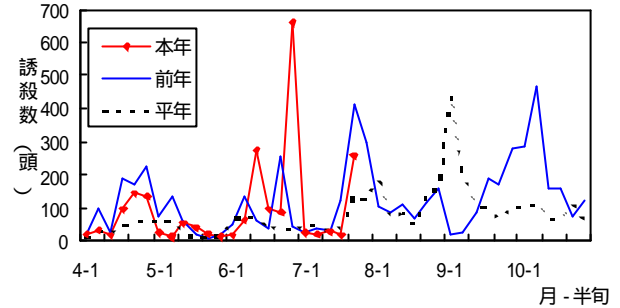
調査地点：筑後市 136頭(平年 241頭、前年 200頭)

八女市 340頭(平年 300頭、前年 619頭)

ウ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である(±)。



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(筑後市)



フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数(八女市)

(3) 防除上の注意

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月末から8月上旬と予想されるので、成虫の発生に注意し、発蛾最盛期の7日後を目安に防除を行う。

イ 捲葉後は防除効果が劣るため、捲葉が見られたら直ちに防除を行う。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少なく、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(-)

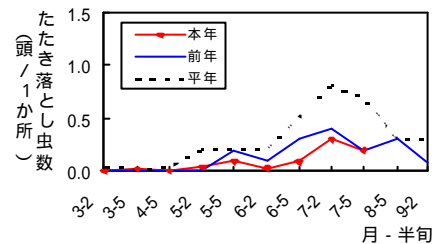
たたき落とし虫数0.2頭(平年 0.7頭、前年 0.2頭)

発生ほ場率 40%(前年 24%)

イ 向こう1カ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

たたき落とし(A4版白紙上)で4頭以上確認される場合は防除を行う。



チャノミドリヒメヨコバイの発生推移

7 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多く、前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(+)

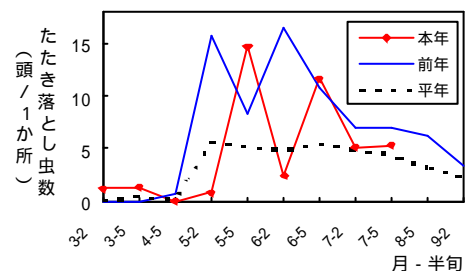
たたき落とし虫数5.4頭(平年 4.5頭、前年 7.1頭)

発生ほ場率 88%(前年 72%)

イ 向こう1カ月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。(±)

(3) 防除上の注意

たたき落とし(A4版白紙上)で10頭以上確認される場合は防除を行う。



チャノキイロアザミウマの発生推移

【野菜】

1 イチゴ(育苗期)のハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(+)

発病株率 12.3% (平年 5.2%、前年 9.8%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並か高く、降水量は平年並である。(+)

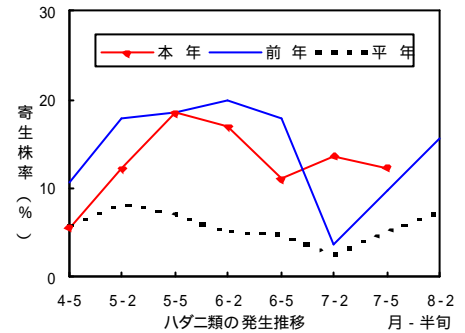
(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発生後は防除が困難になるので、発生状況に十分注意し、初期防除を徹底する。

イ ハダニは摘葉した葉からは急速に移動するので、ほ場内に放置せず、ビニル袋等に入れ密封して処分する。

ウ 株冷・夜冷等の低温処理を行う前に、育苗床での防除を徹底する。

エ ほ場内や周辺の除草を徹底する。



2 イチゴ(育苗期)の炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(±)

発病株率 0.3% (平年 0.8%、前年 0.3%)

イ 7月上旬のエタノール検定結果

7月上旬に苗の下位葉を採取し、エタノール検定を行った結果は表のとおりである。

炭疽病潜在感染株率 16.9%

葉枯れ炭疽病潜在感染株率 9.0%

(3) 防除上注意すべき事項

ア 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、発病を確認した株は速やかに処分する。

イ 排水に留意し、かん水時及び雨滴の跳ね返りを防止する。

ウ 病徴が確認されなくても、潜在感染している可能性がある。エタノール検定の結果、潜在感染株が多く見られるほ場もあるため、定期的に防除を徹底する。

エ 発病後の薬剤散布では効果が低いいため、降雨前後を中心に予防散布を行う。

イチゴ炭疽病 エタノール検定(各地点20株)

調査地点	感染株率(%)	
	炭疽病	葉枯れ炭疽病
前原市長系	0	0
田主丸町牧	10	0
久留米市宮ノ陣町	35	5
筑前町栗田	0	0
福智町伊方	0	0
八女市蒲原	20	0
筑後市上北島	55	0
大川市兼木	0	0
大木町蛭池	0	0
黒木町串毛	25	0
広川町水原	25	0
高田町黒崎開	55	0
岡垣町吉木1	15	0
岡垣町吉木2	35	55
岡垣町新松原	15	15
みやこ町豊津徳政1	0	45
みやこ町豊津徳政2	0	20
行橋市南泉	5	0
行橋市二塚	0	30
豊前市荒堀	20	10
豊前市久路土	40	10
県内平均	16.9	9.0
発生ほ場率	61.9	38.1

3 ネギのシロイチモジヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月5半旬調査結果(+)

被害株率 2.0% (平年 0.8%、前年 0.5%)

イ 向こう1ヵ月の気象予報は、気温は平年並が高く、降水量は平年並である。(+)

ウ 朝倉市のフェロモントラップの誘殺虫数は、7月5半旬で159頭(平年値114.9頭、前年115頭)。(+)

(3) 防除上注意すべき事項

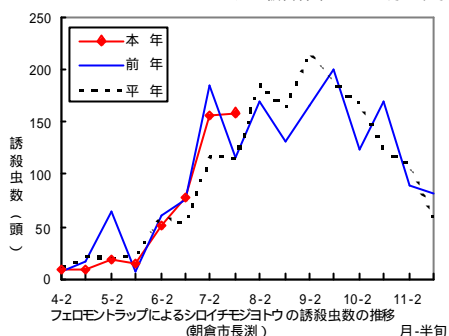
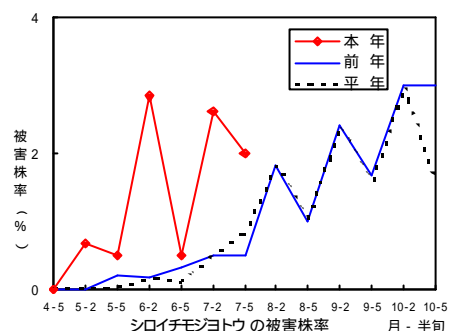
ア 誘殺虫数が平年よりやや多く推移している。ネギでは生育初期に産卵する習性があるため、この時期にほ場での見回りを行う。

イ 葉身に産みつけられた卵塊から孵化した幼虫は、葉身内に食入し内部から食害するため、卵塊や初期の被害葉を見かけたら直ちに除去する。

ウ 薬剤の効果の期待できるのは、孵化後から若齢期の幼虫までで、中齢以降の幼虫に対しては効果が著しく低下するため、孵化直後の幼虫をねらって防除を行う。この時期の目安は、ネギの葉身に綿をつけたように見える小さな卵塊が一番多くなったところである。

エ 施設栽培では、2mm目以下の防虫ネットを設置し成虫の侵入を防ぐ。

オ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 アスパラガスのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い。

(2) 予報の根拠

7月5半旬調査結果(+)

寄生株率 68.0% (平年 35.7%、前年 32.8%)

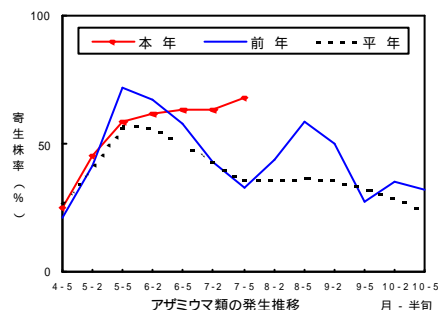
(3) 防除上注意すべき事項

ア 成茎の擬葉を手で払い、落下した虫数で発生状況を確認する(白い紙などで受けると見やすい)。

イ 多発生後は防除が困難となるので、初期防除を徹底する。

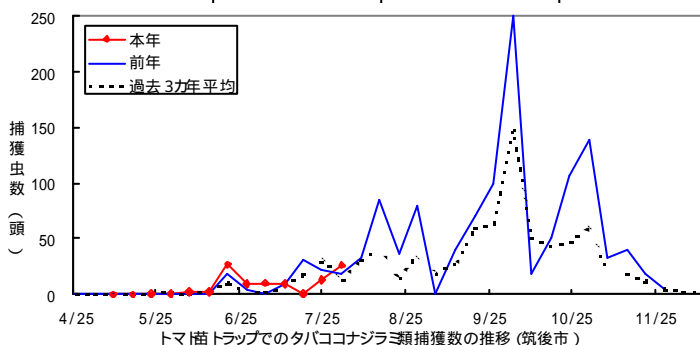
ウ 施設開口部への防虫ネット設置や紫外線カットフィルムの被覆により、害虫の侵入を防ぐ。

エ ほ場内や周辺の除草を徹底する。



【野菜のその他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生現況 (平年比)	発生予報		防除上注意すべき事項等
		(平年比)	(前年比)	
イチゴ うどんこ病	並	並	並	<p>本病は、夏季の高温によって新葉への病勢進展は抑制されるが、罹病部位に潜伏しているため、古葉の除去と薬剤防除を徹底し、本病への持ち込みを防ぐ。 特に、早期作型は夜冷短日や低温暗黒などの処理を行うため、本病菌の越夏を助長するおそれがあるので、低温処理前の防除を徹底する。</p> <p>早期発見に努め、発生初期から防除する。</p>
アブラムシ類	少	並	並	
アスパラガス 斑点病	並	並	やや多	<p>【予報の根拠】 7月5日半旬調査結果は発病株率13.0%(平年13.6%、前年0.0%)であった。 【防除上の注意事項】 8月中下旬から発生が多くなるため、予防散布を行う。 茎葉の過繁茂時期と発病時期が重なるため、余分な茎葉は刈るようにして通風を確保する。 薬剤の散布ムラができないよう、葉の繁茂量によって薬剤量を増やす。</p> <p>早期発見に努め、発生初期から防除する。</p>
ハダニ類	並	並	並	
アブラムシ類 鱗翅目	やや少 並	やや少 並	やや少 並	
野菜共通 コナジラミ類	並	並	並	<p>【予報の根拠】 野外に設置したトマト苗トラップによる捕獲数の推移は左図のとおり。今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。 【防除上の注意事項】 トマトの育苗開始時期が早い作型ほど、コナジラミの発生時期と重なるため、黄化葉巻病に感染する確率が高くなる。 0.4mm目合い以下の防虫ネットを設置し、コナジラミの侵入を防ぐ。 育苗期～定植時の粒剤処理と定期防除を行い、発生を抑制する。</p>



農薬の適正使用、飛散防止の徹底を！

全ての農薬の残留基準が作物毎に設定され基準値を超えた場合は食品（農産物）の販売等が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、農薬の使用基準を厳守するとともに周辺の作物に飛散（ドリフト）しないよう、これまで以上に注意を払う必要があります。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数の使用基準を遵守する。

動力噴霧器、薬液タンクなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 生産履歴の記帳

農薬使用の際は、作物、ほ場毎、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を記帳する。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpnpn.ne.jp